

2020年3月1日（日）「来たれ、神の許に」

マタイ 27:45-56

45 さて、十二時から、全地が暗くなって、三時まで続いた。46 三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。47 すると、それを聞いて、そこに立っていた人々のうち、ある人たちは、「この人はエリヤを呼んでいる」と言った。48 また、彼らのひとりがすぐ走って行って、海綿を取り、それに酸いぶどう酒を含ませて、葦の棒につけ、イエスに飲ませようとした。49 ほかの者たちは、「私たちはエリヤが助けに来るかどうかわかることとしよう」と言った。50 そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。51 すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。

52 また、墓が開いて、眠っていた多くの聖徒たちのからだが生き返った。53 そして、イエスの復活の後に墓から出て来て、聖都に入って多くの人に現れた。

54 百人隊長および彼といっしょにイエスの見張りをしていた人々は、地震やいろいろの出来事を見て、非常な恐れを感じ、「この方はまことに神の子であった」と言った。55 そこには、遠くからながめている女たちがたくさんいた。イエスに仕えてガリラヤからついて来た女たちであった。56 その中に、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、ゼベダイの子らの母がいた。

#### 【序論】

教会暦では、先週の水曜日（2月26日）から受難節に入りました。今年のイースター（復活祭）は4月12日であり、それまでの46日間が受難節となります。受難節のことを英語ではLentと言いますが、この言葉は「断食」を意味する古ドイツ語から来ているそうです。キリスト教徒はこの時期に主イエスの十字架の死を覚え、悔い改めと祈りとに多くの時間を当てます。現代どこまでそのような習慣が守られているかは分かりませんが、ある教会では嗜好品を避け、食材にも配慮した生活を志すよう指導されるといいます。私たちも見習わなくてはならないかもしれません。私は子どもの頃、受難日（主イエスが十字架上で絶命した金曜日）には断食をもってその苦難の一部を味わうよう父親から教えられました。子どもにとって一食抜くことは辛いものでしたが、主イエスが味わわれた苦しみを思えば、それが一体何でしょう。十字架に至るまでの前夜からの試練の連続は、精神、肉体、そして霊的に主イエスを極限まで追い込みました。今日の箇所はまさに受難節に学ぶにふさわしい場面です。

## 【本論】

### 本論 1. 捨てられたイエス

さて、十二時から、全地が暗くなって、三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。(27:45-46)

主イエスが十字架に架けられたのは金曜日の午前9時頃でしたから(マルコ 16:25)、それから3時間ほど経って地変が起きたということになります。3時間に亘る暗闇が実際にどういう形で生じたのかは分かりません。砂嵐によるものか、あるいは太陽が隠れてしまうほど厚い雲で空が覆われたのか。出エジプト 10:22 での、エジプト全土を覆った暗闇を彷彿させる出来事です。これら二つの記事の間には共通点があり、地に対する神の不快感の表れと思われまふ。出エジプト記においてはイスラエルを迫害するエジプトへの神の怒り、そしてここでは神の子を好き放題に罵り嘲る人間世界への神の怒りでしょう。この暗闇には、それだけではなく、いくつかの意味があると思われまふ。この世に来た「まことの光」が取り去られようとしている。主イエスの死によって、一時的にこの世界は光を失うのです。救い主を抹殺し、自ら闇を招く。また、この暗闇は主イエスご自身に対して向けられた神の怒りとも言える。主イエスは本来神の最愛のひとり子であり罪なき方ですから、そもそも怒りの対象とはなり得ないのですが、主は全人類の罪を背負って十字架に架かっておられる。神の怒りは主イエスにこそ向けられなくてはならないのです。主の生涯の目的とはまさしくそこにあつたのですから。

主イエスが叫ばれたことば「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」は、マルコでは「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と訳されています(15:34)。マルコは、恐らく主イエスが唱えたアラム語そのものを記録したのでしょう。しかし、このことばを聞いたある人が「エリヤを呼んでいる」と誤解したということが続く記事にありますので(マタイ27:47)、マタイは意図的に「エリヤ」に近い「エリ」(神)というヘブル語を選択したと思われまふ。いずれにせよ、このフレーズは「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という詩篇22:1からの引用であり、主イエスが長年唱え続けてきた聖句が、今この悲惨な状況においてほとぼしり出たのでしょう。本来この詩篇は絶望の訴えから勝利に至るものなのですが、主イエスが後の復活の勝利を見越してこのことばを発せられたと考える必要はないと私は考えまふ。私たちも経験があると思いまふが、本当に苦しい状況下にあるとき、人は多くの言葉を語れなくなるのです。

私は声楽を習い始めた頃、ヘンデルの歌劇「リナルド」のアリア「Lascia ch' io pianga」を教わりました。「主よ、御手を伸べたまえ」という日本語訳が当てられています、この歌はその後の私の人生で事あるごとに口ずさむものとなりました。本当に苦しいとき、まことに短い歌ですが、これが溢れてくるのです。

主イエスにとりまして、ここでの詩篇22篇の引用というのは、どうにか発し得た最長の聖句だったのではないのでしょうか。主イエスの悲しみ、父なる神様に関係を断ち切られた絶望が物語られています。主イエスを擁護しようとして、「いや、イエス様は実際には父なる神様に見捨てられたのではないのだ」と主張する人もいます。しかし、私はそうは思わない。主イエスは神に捨てられなければならなかったのです。それは、本当は捨てられるべくある者たちの身代わりとなるためです。罪を犯したすべての人が味わわなくてはならない神との永遠の断絶を、主は十字架上で味わい尽くされたのです。

「わが神」という表現は、これまで神を「わが父」（例：26:39, 42）と呼び続けてこられた主イエスの中で、重大な転換が起きていることを表しているでしょう。今や「慈愛の父」はその愛の眼差しを主イエスから背けておられるのです。苦しむ我が子を救ってやりたいという思いを懸命に抑え、御子イエスから目を背けておられる。十字架からお救いにならない。贖いの御業が全うされるために、父も子も共に苦しみに耐えておられるのです。しかし、「わが神」ということばの内には、ご自分を救ってくださらない神への信頼が尚も残されています。孤独の極みにあって、主は神を信じ続けたのです。

## 本論 2. 酔いぶどう酒

すると、それを聞いて、そこに立っていた人々のうち、ある人たちは、「この人はエリヤを呼んでいる」と言った。また、彼らのひとりがすぐ走って行って、海綿を取り、それに酸いぶどう酒を含ませて、葦の棒につけ、イエスに飲ませようとした。ほかの者たちは、「私たちはエリヤが助けに来るかどうかわかることとしよう」と言った。（27:47-49）

この箇所は私にとって長年理解できない課題の部分でした。主イエスのことばを聞いて「エリヤを呼んでいる」と捉えた人々の真意と、実際の主イエスの思いとは。「エリヤを呼ぶ」とは、ユダヤ人全般にとっての期待の表れであり、マラキ 4:5-6 で言われている「世の終りに訪れる人物」を指します。

見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」

主イエスの十字架に伴う 3 時間に及ぶ暗闇は、居合わせた人々にとって恐怖であった。

神の呪いを実感させるものでした。彼らの中で、イエスはもしかしたら本当に神の子なのかもしれない、とんでもない方を処刑したのかもしれない、という不安がよぎった。暗闇は世の終りを象徴するものでしたから(ヨエル 2:1-2, 31、アモス 5:19-20、8:9-10)、本当にこのまま歴史が終わってしまうのではないかという感覚を人々は覚えたのです。「エリヤ」はメシヤの先がけとして訪れるはずの人物であり、主イエスはそれをバプテスマのヨハネと同一視していました(マルコ 9:13)。主イエスの中で「エリヤ」はもう既に来ていたのです。しかし、人々は未だに「エリヤ」の到来を待ち望んでいた。その人物が来た時に歴史は一挙にひっくり返り、ユダヤ人にとって理想の「ダビデ王国」が再建されると。

「酸いぶどう酒」というのは、ローマ兵が持っていた安物のワインで、決して美味しい物ではなかったそうです。それを主イエスに飲ませようとしたのにはどんな意図があったのか。恐らく、エリヤが来るまで死なせないようにしようという興味本位の延命措置なのでしょう(きわめて傍観的)。ルカは、嘲りの行為としてこれが行なわれたと記しています(ルカ 23:36)。

**彼らは私の食物の代わりに、苦味を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました。**

(詩篇 69:21)

ヨハネは、この旧約の預言が成就するための出来事だと説明する(ヨハネ 19:28-30)。つまり、主は死ぬ瞬間まで苦痛を耐え忍ばれたということなのでしょう。

### 本論 3. 裂かれた神殿の幕

**そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。(27:50-51)**

最後の叫びのことばは「完了した」(ヨハネ 19:30)という内容だったと思われます。主イエスは死をもって贖<sup>あがな</sup>いの御業を完了された。最後の最後まで敵に憎しみを向けることなく、赦しを全うし、神への従順<sup>かんでつ</sup>を貫徹されたのです。多くの人の罪を担って死ぬという使命を成し遂げられた。

神殿の幕が裂けたという出来事は、主イエスの贖いの死によって神と人との関係を隔てていた罪の壁が打ち破られたことを象徴しています。この「幕」が神殿のどの部分の幕を指すのかは定かではありません。祭司と一般の信者を区別するための幕か、あるいは聖所と至聖所を隔てていた幕か。意味としては、私は後者を支持しています。民をとりなす大祭司でさえ、年にたった一度の「贖いの日」にしか至聖所に入ることができませんでした。その幕が「上から下まで」裂けたということは、これは人間が「下から」

裂くのと違い、神が一方的な恵みとして「上から」この幕を裂き、誰でもらず神の臨在の許へと入り行けるようになったことを意味します。主イエスを信じる人は誰でもです。このことを象徴するかのよう、54 節以下では二種類の人々が登場します<sup>1</sup>。

百人隊長および彼といっしょにイエスの見張りをしていた人々は、地震やいろいろの出来事を見て、非常な恐れを感じ、「この方はまことに神の子であった」と言った。そこには、遠くからながめている女たちがたくさんいた。イエスに仕えてガリラヤからついて来た女たちであった。その中に、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフとの母マリヤ、ゼベダイの子らの母がいた。(27:54-56)

第一に、ローマの百人隊長の信仰告白がある。この人は、主イエスを十字架刑に処するうえでの最終責任を負っていたと思われます。彼は異邦人であり、神との契約とは無縁でした。そして、主イエスに極度の苦しみを与え、兵士たちによる嘲りとリンチとを許容あるいは指示した人物かもしれない。その「許され得ざる」人が主イエスを「神の子」と認めたのです。この信仰告白にどれほどの含蓄があるかは分かりません。しかし、彼はまことに薄い知識ながら、主イエスを信じたのです。

第二に、遠くから眺めていた女性たちが登場します。女性もまた、古代ユダヤ社会では差別の対象であり、礼拝から締め出されてきた人々です。しかし、そういう人たちのために救いの道が開かれた。主イエスの十字架は、すべての隔ての壁を打ち破ったのです(エペソ 2:14-15a)。女性たちについて解説しておきましょう。

- ・ 「**マグダラのマリヤ**」…主イエスによって7つの霊を追い出してもらった人(ルカ 8:2)
- ・ 「**ヤコブとヨセフとの母マリヤ**」…クロパの妻(ヨハネ 19:25)。主イエスの母の姉妹
- ・ 「**ゼベダイの子らの母**」…サロメ(マルコ 15:40)

これらの女性たちは、主イエスと一緒にガリラヤから巡礼に来たのであり、身の回りの世話を仕えていたようであります。

---

<sup>1</sup> 52-53 節には、主イエスの死と同時に聖徒たちが続々と生き返ったという記述がありますが、挿入的な内容であることと、いつ起きた出来事であるかが不明瞭なため、説教では扱いません。意味としては、主イエスの死が多くの人にいのちを与えたということを表していると思いますが、これらの聖徒が旧約時代の人々の信仰者のことなのか、主イエスの時代に先に召された信仰者のことなのかは不明瞭です。また、I コリント 15:20 には「しかし、**今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました**」という聖句があり、主イエスの復活を経て信者の復活も起きることが暗示されています。よって、筆者は 52-53 節を、主の復活後に起きた出来事がこの部分に挿入されたと理解しています。

## 【結論】

本来死を知ることのない神の子の死という壮絶な場面から学びました。主イエスは死ぬ必要のないお方であったにも拘らず、十字架刑という極刑の下に死ぬ道を選び取られた。何のためか。私たち罪人を神の臨在の許に招くためではありませんか。ローマの百人隊長という、「最もふさわしくない者」が救いに選ばれたのです。そうであるならば、今ここに集う私たちのためにも主が死んでくださらなかったはずがありませんか。私たちは主イエスにあって神のものとされました。今や神と私たちとを隔てていた罪の壁は取り払われ、神と直接交流できる道が開かれているのです。

キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。聖霊も私たちに次のように言って、あかしされます。「それらの日の後、わたしが、彼らと結ぼうとしている契約は、これであると、主は言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いに書きつける。」またこう言われます。「わたしは、もはや決して彼らの罪と不法とを思い出すことはしない。」これらのことが赦される場所では、罪のためのささげ物はもはや無用です。こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。また、私たちに、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。」（ヘブル10:14-22）

## 【祈り】

仲介者なるイエス様。神と私たちとの間を隔てていた「罪の壁」は、あなたの死によって取り去られました。今や、私たちは憚らず聖なる神の許へと歩み行くことができます。しかしながら、それでいて私たちは自らの罪深さを知り、尚も恐れ、踏み止まってしまう者です。そんな私たちを励まし、大胆に神との交わりを味わわせてください。その一步踏み込んだ交流には、どれほどの喜びがあることでしょうか。その永遠的味わいを、一人一人が知ることができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

切っても切れぬ御子との関係を断ち、その犠牲によって、罪人との契約を打ち立て給うた、父なる神の愛、

人々の無理解と嘲りの中、肉体・精神・霊において、苦しみを舐め尽くされた、主イエス・キリストの恵み、

開かれた神殿の幕を通り、大胆に神の許へと進み行かせ給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。